佐賀県文化財調査報告書第63集

久留間カミ塚遺跡A地点

——佐賀郡大和町所在——

1982.3

佐賀県教育委員会

佐賀県文化財調査報告書第63集

久留間カミ塚遺跡A地点

——佐賀郡大和町所在——

1982.3

佐賀県教育委員会

序

この報告書は、昭和55年度圃場整備事業の施工に先がけて、国庫補助金を受け実施した佐賀郡大和町大字久留間に所在する久留間カミ塚遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告であります。

昭和25年に一部発掘調査が行われ、弥生時代の集落跡として注目されていた所であり、今回の調査でも多数の遺構と遺物が検出されました。この時代の生活文化を解明する上で重要な意味をもつものと考えられます。

本書が、埋蔵文化財に対する理解に、少しでも役立てば幸甚です。

おわりに、この調査に際しまして御指導、御協力いただきました文化庁、県農林部、大和町教育委員会、同土地改良課、並びに地元の関係各位に、心からお礼申し上げます。

昭和57年３月

佐賀県教育委員会

教育長　古　藤　　浩

例　　言

1．本書は、昭和55年度圃場整備事業に伴い発掘調査を実施した、久留間カミ塚遺跡の報告書である。

2．発掘調査は、国庫補助を受け、佐賀県教育委員会がおこなった。

3．遺構実測及び写真撮影は、主に調査員があたった。

4．遺物の整理復元・実測・整図等は、福田京子、樋口菅子、中村美千代、梅野澄子、三好文子、古賀安子、永池早苗、中島美須三、宮崎礼子、高畠澄子、広滝敏子、古川万鶴代、新井久美、池田覚子、村瀬邦子、土井マサ子、野口百合子、松崎恭子、友清淑子、山本タカ子、藤原倫子、　野口悦子、島孝子、馬場悦子、本田京子がおこなった。また写真は、原口定、古賀栄子がおこなった。

5．本書の執筆は西田和己が、編集は本田京子の協力により西田がおこなった。

凡　　例

1．遺構については、各遺構ごとに一連番号を付し、その前に、ＳＤ：溝、Ｐ：小穴、ＳＸ：その他の遺構の分類記号を標記する。なお、遺構番号の２ケタ数字はＡ区、３ケタはＢ区を表わす。

2．本文中に用いた方位はすべて磁北である。

3．遺構実測図番号と図版遺物番号は同一である。

目　　次

Ⅰ．はじめに
1．久留間カミ塚遺跡とその周辺……1
2．調査の経過……2
(1) 調査に至る経過……2
(2) 調査組織……2
(3) 調査の経過・日誌……2
Ⅱ．遺構と遺物
1．遺構……7
2．遺物……14
Ⅲ．まとめ

挿　図　目　次

Fig. 1　久留間カミ塚遺跡周辺遺跡分布図……3
Fig. 2　久留間カミ塚遺跡調査区位置図……6
Fig. 3　A区遺構配置図……9
Fig. 4　B区遺構配置図……11
Fig. 5　SX101出土土器実測図 (1)……15
Fig. 6　SX101出土土器実測図 (2)……17
Fig. 7　SX101出土土器実測図 (3)……18
Fig. 8　SX101出土土器実測図 (4)……19
Fig. 9　SX101出土土器実測図 (5)……21
Fig.10　SX101出土土器実測図 (6)……23
Fig.11　SX101出土土器・石器実測図 (7)……24
Fig.12　SD05・101溝・P120出土土器実測図……26

表　目　次

Tab. 1　溝跡一覧表……13
Tab. 2　主小穴一覧表……13

図　版　目　次

PL. 1　1．久留間カミ塚遺跡全景（南西から）
　　2．久留間カミ塚遺跡全景（南から）
PL. 2　1．A区北側全景（北から）
　　2．A区北側全景（南から）
PL. 3　1．A区南側全景（北から）
　　2．B区全景（東から）
PL. 4　1．SD03溝（北から）
　　2．A区北側P28付近（北から）
PL. 5　1．P23（北から）
　　2．P17．P20（北から）
　　3．P24（北から）
PL. 6　1．SD05溝（南から）
　　2．SD05溝（北から）
　　3．SD07．08溝（東から）
PL. 7　1．A区南側近景（南から）
　　2．A区南側近景（北から）
　　3．A区南側近景（西から）
PL. 8　1．P53（西から）
　　2．P51（西から）
　　3．SD11溝（西から）
PL. 9　1．P110付近(西から)
　　2．P109(北から)
　　3．P108(北から)
PL.10　1．B区東側近景（南から）
　　2．P102付近(北から)
　　3．SD101溝およびP120（東から）
PL.11　1．SX101(北から)
　　2．SX101遺物出土状態(北から)
　　3．SX101遺物出土状態(北から)
PL.12　1．SX101遺物出土状態(南から)
　　2．SX101遺物出土状態(東から)
　　3．SX101遺物出土状態(南から)
PL.13　1．SX101遺物出土状態(南から)
　　2．SX101遺物出土状態(東から)
　　3．SX101遺物出土状態(北から)
PL.14　SX101出土土器 (1)
PL.15　SX101出土土器 (2)
PL.16　SX101出土土器 (3)
PL.17　SX101出土土器 (4)
PL.18　SX101出土土器 (5)
PL.19　SX101出土土器 (6)
PL.20　SX101出土土器・石器 (7)
PL.21　SD05・101溝・P120出土土器

Ⅰ．は　じ　め　に

1．久留間（くるま）カミ塚遺跡とその周辺

久留間カミ塚遺跡は、佐賀郡大和町大字久留間字二本松に所在する。この遺跡は、昭和25年に九州綜合文化研究所を中心として調査が行われ、松尾禎作・七田忠志両氏によって報告がなされている。[101]

久留間カミ塚遺跡のある大和町は、県内においても特に遺跡の密集する所として知られている。町の北部には脊振山地が東西に走り、この山系を源にする大小河川は、大小の扇状地を形成し、さらに佐賀平野を形造っている。遺跡の立地は、山系から伸びる舌状台地上や扇状地に特に多い。しかし、遺跡の数の割には、大和町における発掘調査はまだ少ない。今後、九州横断自動車道建設や農業基盤整備事業など各種開発事業に伴い、調査数も増加する傾向にあり、遺跡の消滅と引き換えに、新たな資料を提供してくれよう。先土器時代の遺跡はほとんど知られていないが、久池井一本松遺跡[102]からは原材が水晶のナイフ型石器が出土している。縄文時代になるとその数も増え、山麓部一帯には早期～晩期におよぶ土器・石器が散布している。久池井一本松遺跡、今山遺跡などがあり、佐賀県遺跡地図[103]によると大和町だけで48ヶ所が知られている。縄文晩期～弥生前期に至る時期については支石墓・甕棺・壺棺をもつ佐賀市の丸山遺跡[104]が有名であるが、礫石遺跡（つぶていし）[105]では、壺棺や石棺などの埋葬施設のほかに供献土器も出土しており注目される。弥生時代の遺跡は久留間カミ塚遺跡の周辺だけでも、久留間遺跡・久留間五本松遺跡・池上遺跡[106]・楢田遺跡・楢田三本松遺跡[107]などがある。集落ではこのほかに弥生時代の調査例としては惣座遺跡[108]、墓地では七ヶ瀬遺跡[109]があげられよう。また尼寺南小路から広形銅戈、惣座遺跡から舶載鏡片と小型仿製鏡が、礫石遺跡から小型仿製鏡が出土している。山麓部には古墳が密に分布しており、また前方後円墳は大和町で８基確認されている。県下最大の前方後円墳で現在で７基の陪塚を有している舟塚[10・11]をはじめ、前隈山古墳・築山古墳・水上古墳・小隈山古墳・男女神社西古墳、久留間カミ塚遺跡東方の池上集落内にも風楽寺古墳・道善寺古墳がある。円墳としては琴柱形石製品や竹櫛を出土した森の上古墳[12]、鉄製の武器類や農工具、それに仿製内行花文鏡、玉類を多量に副葬した高畠古墳[13]、仿製の内行花文鏡を出土した小隈古墳[14]のほか、礫石古墳群などがある。古墳時代の集落はまだ調査されていないが、尼寺一本松遺跡では包含層から古墳時代前期の土器を多量に検出している。歴史時代になると肥前国の中心、肥前国府が久池井付近に置かれる。国府域・国庁域にも諸説があるが、県教育委員会により継続調査が行われており、第６次調査[15]（昭和55年度）では政庁とみられる建物跡が検出され、今後の調査に期待がかかる。このほかに肥前国分寺跡[16]・国分尼寺跡[17]・大願寺廃寺跡[18]・西山遺跡[19]などがある。

久留間カミ塚遺跡の調査は前述したとおり昭和25年に行われている。報告によると調査は約700㎡について実施され、遺構としては竪穴式住居跡、泉、洗い場が検出されている。遺物としては弥生時代後期前半を中心とした土器・石器・木製品・植物種子のほか、奈良時代の石帯が出土している。残念ながらその後の土地区画整理事業で現状が変更しており、前回の調査地域がどこにあたるのか不明のままである。ただ今回、多量の土器群が出土したＳＸ01遺構付近が前回の主発掘区付近であろうことが推定できる。

なお、今回の調査のほかに、昭和56年度事業として、県道佐賀～松尾停車場線の建設に伴い調査[109]が行われている。今回の調査区のすぐ北側（Fig.2参照）にあたり、弥生時代の甕棺墓・土壙墓・石棺墓で構成している墓地と、大和町では初めて筒形器台をもつ祭祀遺構を検出している。

註(1)　松尾禎作・七田忠志「久留間遺跡調査概報」『佐賀縣史蹟名勝天然記念物調査報告』第10輯　佐賀県教育委員会　1951

註(2)　九州横断自動車道建設に伴い、今年度県教育委員会が調査

註(3)　多々良友博編『佐賀県遺跡地図（佐城地区）』　佐賀県教育委員会　1980

註(4)　中島直幸編『丸山遺跡発掘調査概報』　佐賀県教育委員会　1979

註(5)　註(2)と同じ

註(6)　県教育委員会が1980年に調査。佐賀県教育委員会『久留間カミ塚遺跡Ｂ地点』に所収予定

註(7)　註(3)参照

註(8)　立石泰久編『肥前国府跡Ｉ』　佐賀県教育委員会　1978

註(9)　七田忠昭編『七ヶ瀬遺跡』　大和町教育委員会　1981

註(10)　『佐賀県の遺跡』　佐賀県教育委員会　1964

註(11)　『大和町史』　大和町教育委員会　1975

註(12)　松尾禎作「春日村森の上古墳」『佐賀縣史蹟名勝天然記念物調査報告』第８輯　佐賀県教育委員会　1949

註(13)　松尾禎作「都渡城高畠古墳」『佐賀縣史蹟名勝天然記念物調査報告』第８輯　佐賀県教育委員会　1949

註(14)　註(11)に同じ

註(15)　第１次～第３次調査は註(8)に所収　田平徳栄編『肥前国府跡II』（第４次～第６次）　佐賀県教育委員会　1981

註(16)　高島忠平他、『肥前国分寺跡発掘調査概報』　大和町教育委員会　1975

註(17)　松尾禎作「肥前国分寺及尼寺」『佐賀縣史蹟名勝天然記念物調査報告』第６輯　佐賀県教育委員会　1938

註(18)　松尾禎作「大願寺廃寺址」『佐賀縣史蹟名勝天然記念物調査報告』第７輯　佐賀県教育委員会　1940

註(19)　木下之治『西山遺跡』佐賀県文化財調査報告書第28集　佐賀県教育委員会　1974

註(20)　高瀬哲郎編『久留間カミ塚遺跡II』　佐賀県教育委員会　1982年３月に刊行予定

Fig. 1　久留間カミ塚遺跡周辺遺跡分布図

1．西限古墳
2．森の上古墳群
3．久池井一本松遺跡
4．礫石遺跡
5．前限山古墳
6．都渡城遺跡
7．惣座遺跡
8．肥前国府跡
9．肥前国分寺跡
10．築山古墳
11．肥前国分尼寺跡
12．銅戈出土地
13．南小路支石墓
14．西山遺跡
15．大願寺廃寺跡
16．今山遺跡
17．船塚古墳
18．男女山古墳群
19．向坂山古墳群
20．西野角古墳群
21．七ヶ瀬遺跡
22．下戸田遺跡
23．久留間遺跡
24．池上遺跡
25．風楽寺古墳
26．風楽寺南古墳
27．道善寺古墳
28．楢田遺跡
29．楢田三本松遺跡
30．久留間カミ塚遺跡

2．調査の経過

(1) 調査に至る経過

佐賀郡大和町大字久留間一帯の水田約 120 haが昭和55年度県営圃場整備事業地区として計画された。このため県文化課は工事の施工に先立ち、埋蔵文化財の確認調査を行い、大和町大字久留間字二本松付近の久留間カミ塚遺跡として知られる水田一帯で遺構を確認し、遺跡の範囲も24,000㎡以上におよぶものと推定した。この結果をもとに農林部と文化財保護について協議を行ない、さいわいにもこの工事区では表土扱いをしないため、田畑部分は保存の方法を採り、水路として掘削される約1,200㎡について発掘調査を実施することになった。

(2) 調査の組織

主体	佐賀県教育委員会
事務局	佐賀県教育庁文化課（課長　藤山巌）
調査主任	木下巧　文化財調査第２係長
調査員	西田和己　文化財調査第２係
	川崎吉剛　　同　　上
地元協力者	太田鉄造、八頭司次代、牟田ロタニ、古川栄子、川原貞子、陣内ツネクリ、八頭司ヨシノ、池町秋代、野口ミツ子、上滝一枝、納富ミサオ、上滝しのぶ、上滝久雄、東島良子、藤井チエ子、本野ミネ子、岡本サチ子、百武アサ子、中村夏江、上滝テルミ、野田セキ子、池田ヨシ子
調査協力	県農林部、中部農林事務所、大和町教育委員会、大和町土地改良課、久留間区、楢田区

(3) 調査の経過・日誌

発掘調査は、昭和55年４月22日より８月26日までの４ヶ月にわたり実施した。当初２ヶ月ほどの予定であったが、この年は例年になく降雨量が多く、作業が中断することがたびたびであり、また調査区域が天井川である東平川の堤防沿いということや、調査区南側に土手がめぐっているために、大雨の後はあたりの水田一帯が冠水して、水が引くまで一週間以上かかることもあった。湧水も激しく、毎日ポンプを作動させなければ作業ができないという、まさに水との闘いだった。

調査は東平川の堤防沿いの幅３ｍ、長さ140ｍと、その南端から西へ延びる幅10ｍ、長さ50ｍの合わせて約1,200㎡について実施した。

なお、調査後の整理作業は神埼発掘事務所、および文化財資料室にて行った。

調査日誌

4月22日　鍬入れ式（中部農林事務所、大和町土地改良課、教育委員会、地元関係者）
　　重機による表土剝ぎ。

4月23日　作業員入り、調査開始。

4月25日　P23、24、SD04溝を検出。P24より平安時代の土師器片が出土する。

5月1日　北側部分遺構検出終了。精査、写真撮影。

5月2日　南側部分に入る。SD05溝の掘り方。上層より内黒土器出土。

5月10日　SD05溝の掘り方。水が湧き出るため排水しながら行なう。層位がつかみにくい。

5月16日　SD05溝の南側を掘り方。小穴のみで遺物はあまり出土せず。

5月22日　全景およびSD05溝の写真撮影。

5月23日　東西水路部分に入る。遺構面精査作業。東側部分に土器が多量に混入している。

5月27日　土器溜り（SX101）掘り方。湧水が激しく、層位的につかむことがむずかしい。

5月28日～6月10日　大雨により調査区冠水し、作業できず。

6月11日　作業再開、排水作業。

6月17日　SX101遺物出土状態写真撮影。

6月18日～23日　雨のため現場作業できず。

6月24日　再開。終日排水作業。

6月27日　SX101掘り方続行するが、作業はなかなかはかどらない。

7月5日　SX101下層掘り方。底までは落ち込み面から50cmたらず。

7月15日　雨のため10日間ほど作業できず。テントの部分まで冠水し、テント内の整理、および排水作業。

7月17日　SX101掘り方終了。

7月18日　東西水路部の中央掘り方。小穴を検出。

7月23日　西側部分掘り方。溝があるが、遺構面ははっきりしない。

7月26日　西側溝掘り方。

7月31日　また雨。現場に入れない。

8月6日　再開。午前中排水作業、午後溝掘り方。

8月8日　SD101溝掘り方。溝のなかに円形湧水部分があり、P120とする。井戸跡か。

8月9日　溝掘り方および実測。

8月25日　現場作業再開。

8月26日　実測および遺物水洗い終了。現場は本日をもって解散。

8月27日　機材撤収。

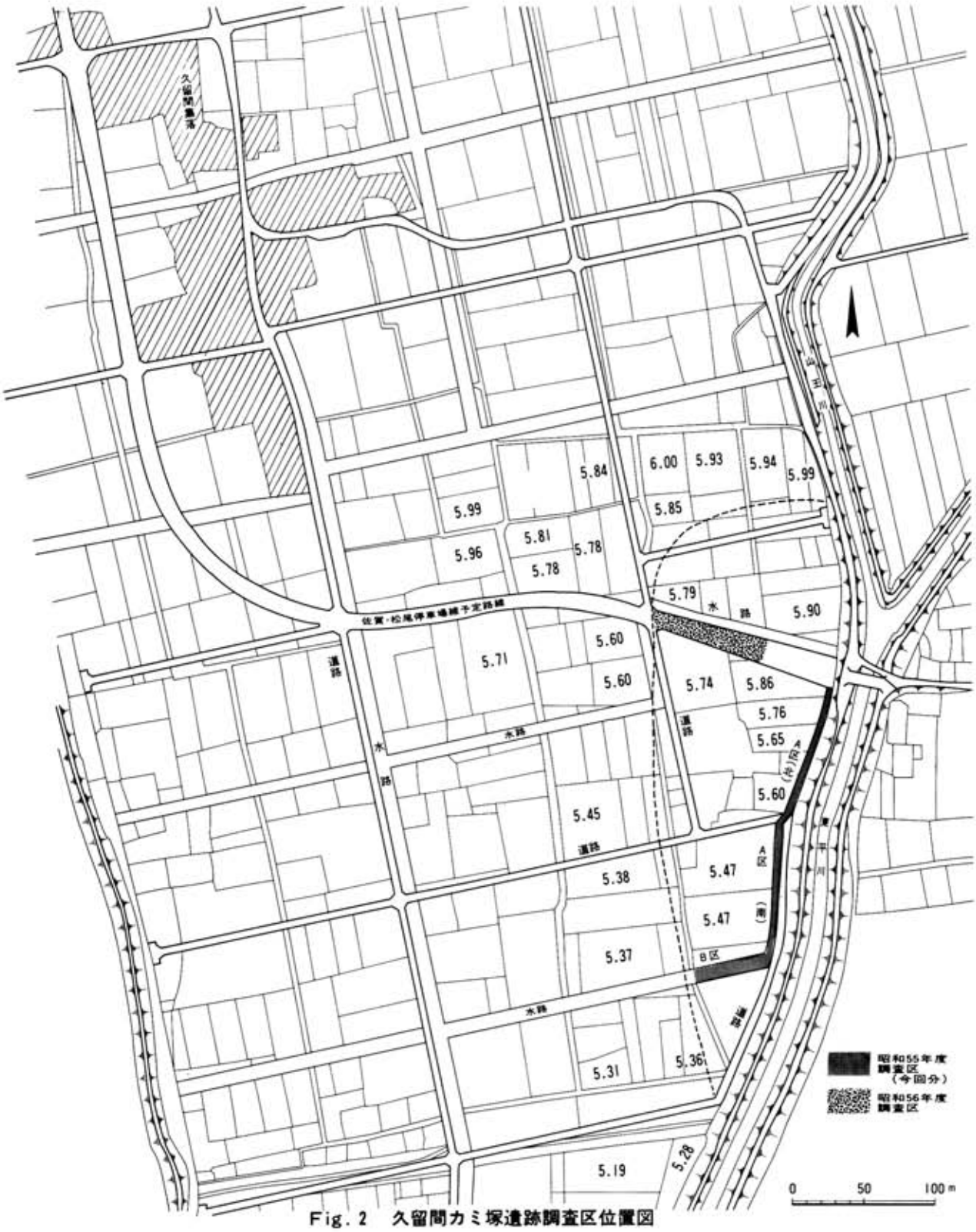


Fig. 2　久留間カミ塚遺跡調査区位置図

II．遺構と遺物

1．遺構

今回の調査で検出した遺構は、溝、小穴、それに土器留り状遺構がある。遺構の検出面は現状より約50cm下の暗灰色粘土層で、A区南側とB区中央の一部分は黄褐色土層である。A区北端部分は約20mに渡って遺構を検出できず、A区南側とB区の間には落ち込みが約15m程続き、砂が堆積しているが遺物はほとんど含まれていない。B区西側は攪乱を受け遺構は確認できなかった。

昭和25年の調査区域は、調査概報から推測して、主調査区がB区の土器留り状遺構(SX101)付近であったろう。当時東平川の堤防補修のため土採りをした場所が堀として残っていたが、後年の耕地整理事業によって埋め立てられ、その位置を把握しにくくなった。今回の調査で確認したA区とB区の境付近の落ち込み部分が、土採り場跡と考えられる。B区の中央に幅1mの細長い掘り込みがあり、主調査区も幅1m、長さ8mの畦畔を掘っているところから、主調査区ではないかと考えたが、回りの状況からして違うようである。いずれにせよ当時の調査区とのはっきりとした照合はできなかったが、SX101の土器出土状態からみて、この付近を中心に調査がなされたと考えられる。検出された遺構としては、一辺が約1.7mの方形の泉および洗い場がある。洗い場からは加工木材が検出され、洗い場の木枠か土留としてとらえられている。住居跡は平面的に検出されたものでなく、堀の土層断面に確認されたものであり、竪穴式住居が考えられている。

今回の調査では竪穴式住居は確認できなかった。掘立柱建物の柱穴を検出しているが、A区北側のP30付近、南側P40付近の比較的多い部分では建物を復元できるものはなかった。B区のP108、109、110、の柱穴は柱間が約3mの等間隔で並び建物跡が考えられるが、調査区域外に広がっており規模は不明である。P108、109の埋土から平安時代前半頃の土師器片が出土している。

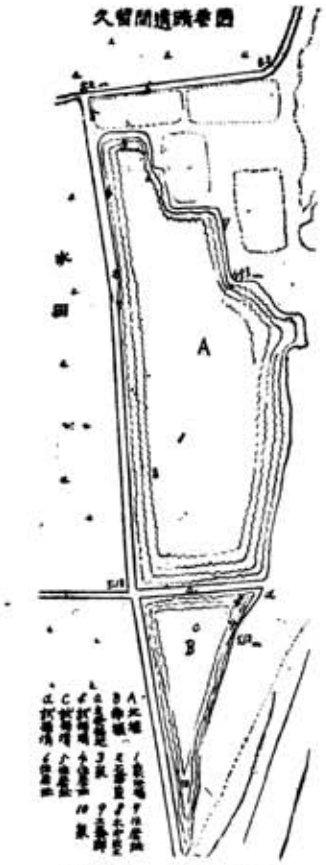
溝はA区に11条、B区に1条ある。幅は0.24mと細いものから、SD05溝の2.4mまである。幅が0.5m以下の溝は、深さが0.2mもない浅いもので、出土遺物も磨耗した土器片が多く時期はわかりにくい。SD05溝は幅2.4m、深さ0.61m、N－E30°の方向へ走る溝である。黒褐色粘質土が堆積しており、底付近は砂混じりの黒褐色粘質土である。溝底の数ヶ所から水が湧きでている。遺物は上層から多く出土し、下層にはあまりなかったが、溝底から古墳時代前期の土器が出土している。SD101溝は幅1.5m、深さ0.4m、N－E64°の方向へ走る溝でP120と切り合っている。このP120は径が0.55m、深さ0.35m、平面が円形のものであるが、ひときわ水の湧出する所であり、井戸としての使用も考えられる。SD101溝とP120の新旧は不明だが、

ＳＤ101溝からは平安時代前半頃の土師器杯が出土している。

ＳＸ101はＢ区東側にあり、弥生時代後期前半を中心とする大量の土器群が出土しており、今回調査出土量の⅔以上を占めている。土器は南側部分で一括して出土し、他の部分との差は大きい。土器が一括して出土した部分を除けば、埋土は砂混りの粘質土で土採りの跡と考えられ、ＳＸ101の遺構そのものも攪乱を受けている。形態や規模については不明である。土器群は弥生後期前半を中心とした壺、甕、鉢、高杯、器台、ミニチュア土器、石包丁等が約30cmの間に層をなして堆積している。

これら以外にはＰ23、Ｐ24等の土壙と考えられる小穴がある。主な小穴についてはTab 2に示している。

今回検出した遺構は、調査区域との関連上相互関係などをつかめるものはなく、遺跡の中心がどこに位置するのか不明なままである。



第十四圖　遺跡區分圖

第十八圖　泉及洗い場

佐賀縣史蹟名勝天然記念物調査報告書第10輯
「久留間遺跡調査概報」より抜枠

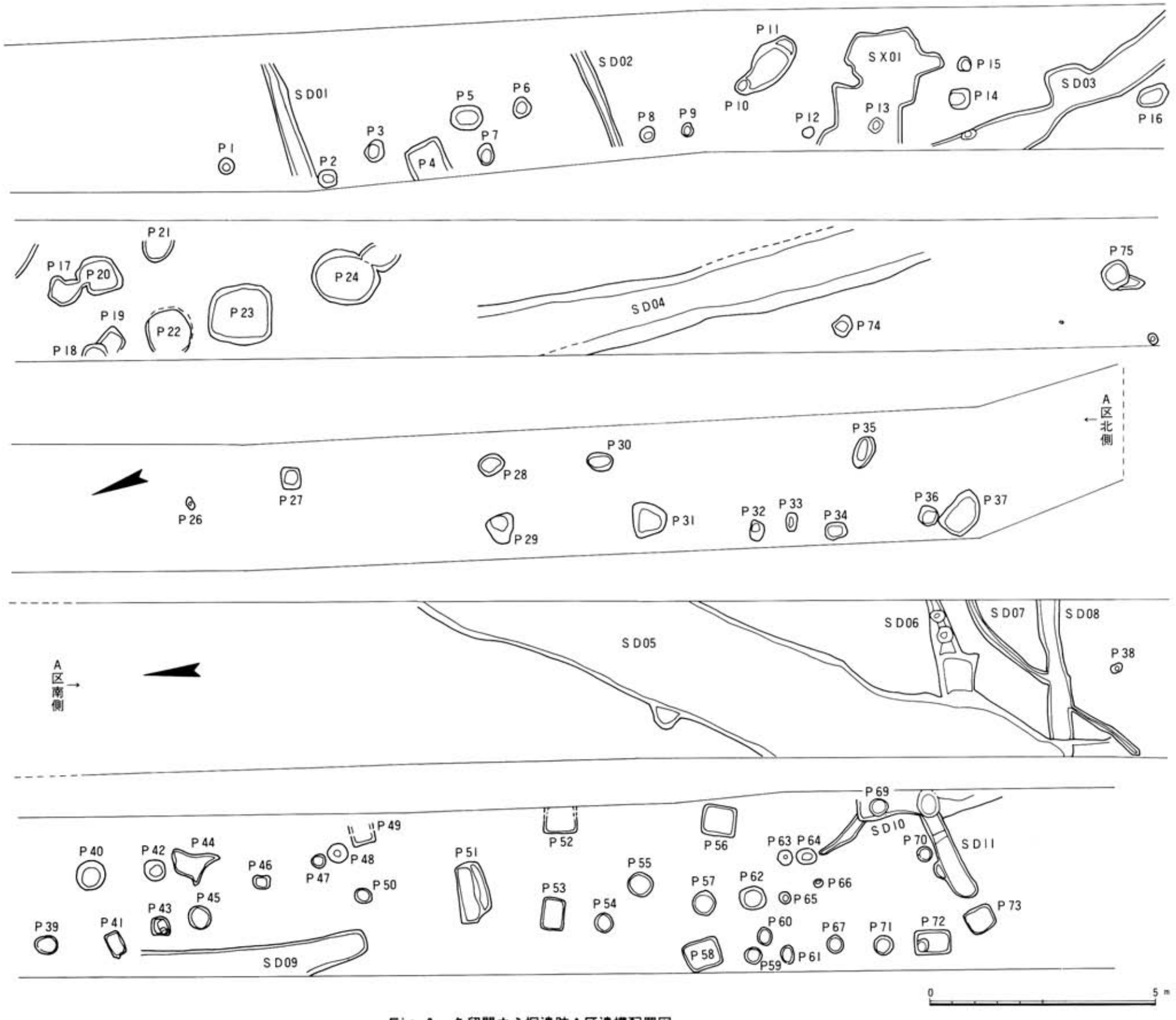


Fig. 3　久留間カミ塚遺跡A区遺構配置図

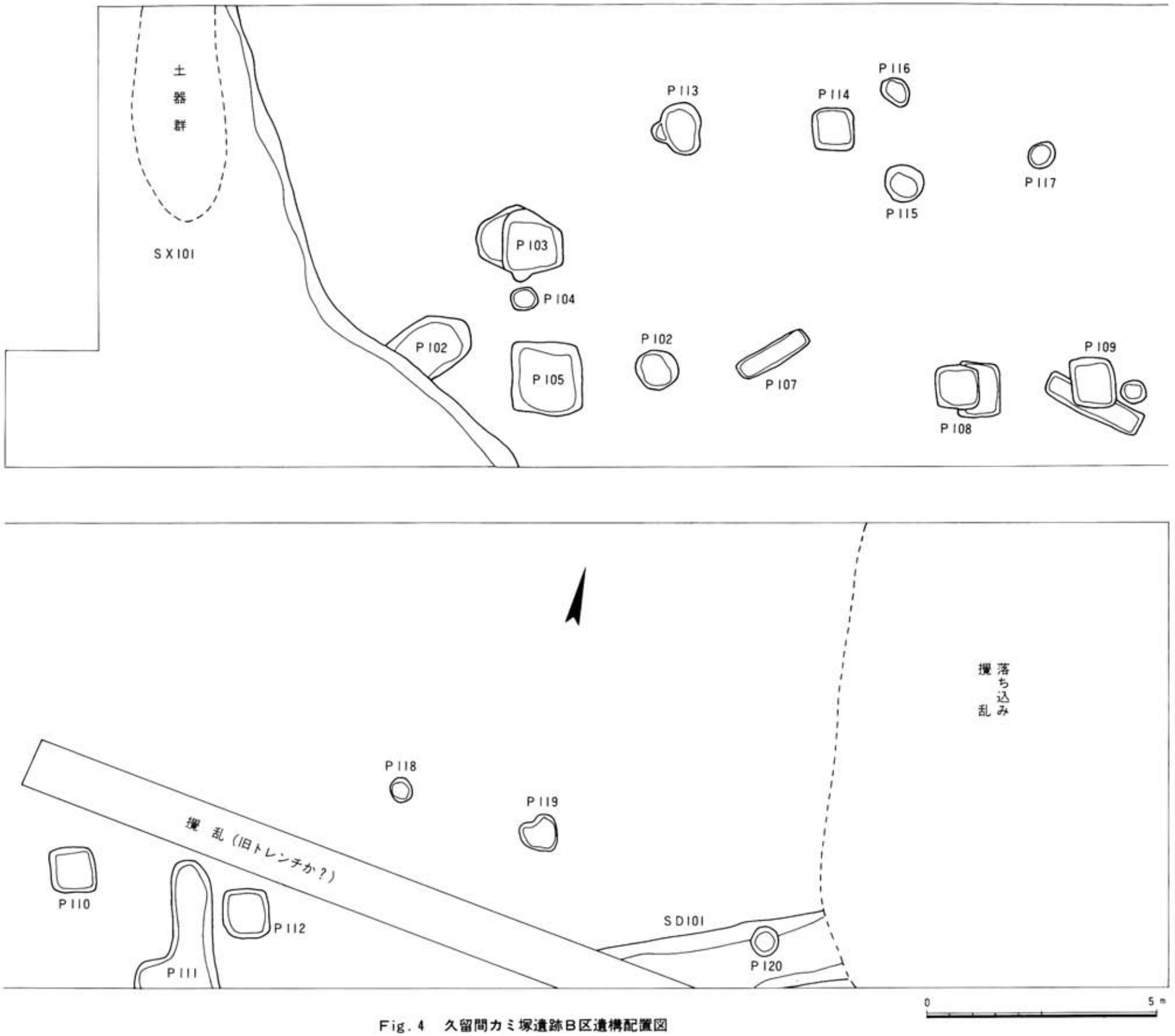


Fig. 4　久留間カミ塚遺跡B区遺構配置図

Tab. 1　溝跡一覧表

遺構番号	法量(幅×深)　単位：m	方　　位	備　　考
SD 01	0.55×0.15	N－W86°	
SD 02	0.34×0.1	N－E87°	
SD 03	0.94×0.1	N－W 9°	
SD 04	1.5 ×0.4	N－E 8°	
SD 05	2.4 ×0.61	N－E30°	
SD 06	0.5 ×0.18	N－E81°	SD05より新
SD 07	0.24×0.12	N－E45°	SD08と切り合う
SD 08	0.5 ×0.1	N－E88°	SD05・07より新
SD 09	0.56×0.1	N－W 4°	
SD 10	――×0.24	N－W 1°	
SD 11	0.44×0.27	N－E72°	
SD101	1.5 ×0.4	N－E64°	P120と切り合う。

Tab. 2　主小穴一覧表

遺構番号	平 面 形	法量(長×幅×深)　単位：m	備　　考
P 11	楕 円 形	1.66×0.84×0.2	
P 23	隅丸方形	1.4 ×1.3 ×0.32	
P 24	円　　形	∅1.66×0.39	土師器出土
P 37	隅丸方形	0.96×0.76×0.42	
P 51	長 方 形	1.4 ×0.7 ×0.3	
P 52	方　　形	0.74×　　×0.13	
P 53	方　　形	0.7 ×0.58×0.26	
P 56	方　　形	0.74×0.68×0.31	
P 58	方　　形	0.8 ×0.62×0.35	
P 72	方　　形	0.77×0.6 ×0.3	
P102	円　　形	1.5 ×1.32×0.4	
P103	不整方形	1.3 ×1.3 ×0.3	
P105	方　　形	1.55×1.5 ×0.42	
P107	長 方 形	1.65×0.45×0.1	クイ1本残る
P108	方　　形	0.95×0.9 ×0.56	土師器出土
P109	方　　形	1.05×0.96×0.4	〃
P110	方　　形	0.96×0.94×0.2	
P113	楕 円 形	1.1 ×0.75×0.3	
P114	方　　形	0.9 ×0.88×0.25	
P120	円　　形	∅0.55×0.35	井戸跡か、湧水地

2．遺物

出土した遺物には、弥生時代の壺・甕・鉢・高杯・器台・支脚・土製品・石包丁などのほか、平安時代前半の土師器椀・杯がある。１点のみではあるが、縄文時代晩期の甕片が出土している。また古墳時代前期の土器も若干みられる。遺構別ではＳＸ101出土が総出土数の半数以上を占めている。他にはＳＤ05･101溝で比較的まとまって出土している以外は出土数も少なく、また小破片が多く、復元しにくい。ここではＳＸ101出土の遺物を中心にみていくことにする。

ＳＸ101出土遺物

壺（Fig.５－１～９、PL.14）

１～６は口縁部片で、袋状をなすものである。１は屈曲部から直線的に内傾し、屈曲部は強くナデている。外面はわずかにハケ目が残り、内面はヨコナデ。復元口径14.4cm。２～４は頸部に断面三角形の突帯をめぐらす。２・３に比べて４は屈曲部に丸味を持ち、内傾の度合が少ない。２は復元口径17.2cm。外面はヨコナデとナデ、内面はナデである。３は復元口径16.4cm。口縁部は内外面ヨコナデ、頸部突帯部分はヨコナデ、その他はナデである。４は復元口径17.2cm。口縁部内外面はヨコナデ、頸部にはハケ目が残る。５は屈曲部から直線的に内傾する。器面が磨耗しているが口縁部外面にハケ目が残る。復元口径17.0cm。６は頸部が大きくくびれず、口縁部は丸味をもって内傾し、稜は不明瞭である。口縁部はヨコナデ、頸部内面はナデ、外面は磨耗のため不明瞭。復元口径12.4cm。７は頸部から肩部にかけて残存し、口縁上部は欠けている。頸部は短く、口縁部は大きく外反する。頸部に断面三角形突帯をもつ。口縁部外面はヨコナデ、頸部は外面ハケ目、内面ナデ。肩部は外面ハケ目の後ナデ、内面はナデである。８は胴部やや上位に最大径をもち、頸部にかけては直線的に内傾している。底部はやや上げ底気味である。体部外面はハケ目、底部外面および内面はナデ、残存器高17.5cm、胴部最大径18.8cm。９は平底で、丸味をもつ胴部がつくもので、口縁部は欠けている。胴部中位よりやや上方に最大径をもち、胴部と頸部に断面三角形突帯をめぐらしている。胴部外面はハケ目、内面はヘラ状工具のあたった痕跡がみられる。内外面ともに丹塗りの痕跡がある。胴部最大径29.2cm、残存器高27.7cm。

甕（Fig.６・７・８－28～33. PL.14・15・16）

10は今回の調査で出土した唯一の縄文時代晩期の甕の口縁部である。屈曲部から直線的に内傾し、口縁端部は直口する。口縁部外面に刺突文を、また屈曲部はやや強調したうえに刺突文を施している。外面はナデ、内面は条痕の後ナデている。残存器高8.35cm。11～16は大型甕の口縁部片で、14はやや小ぶりである。11は外反する口縁部上端に粘土を貼付けて平坦口縁に近くしており、やや内側に傾斜する。口縁部はヨコナデで、刻み目を施す。12はＴ字形口縁を有

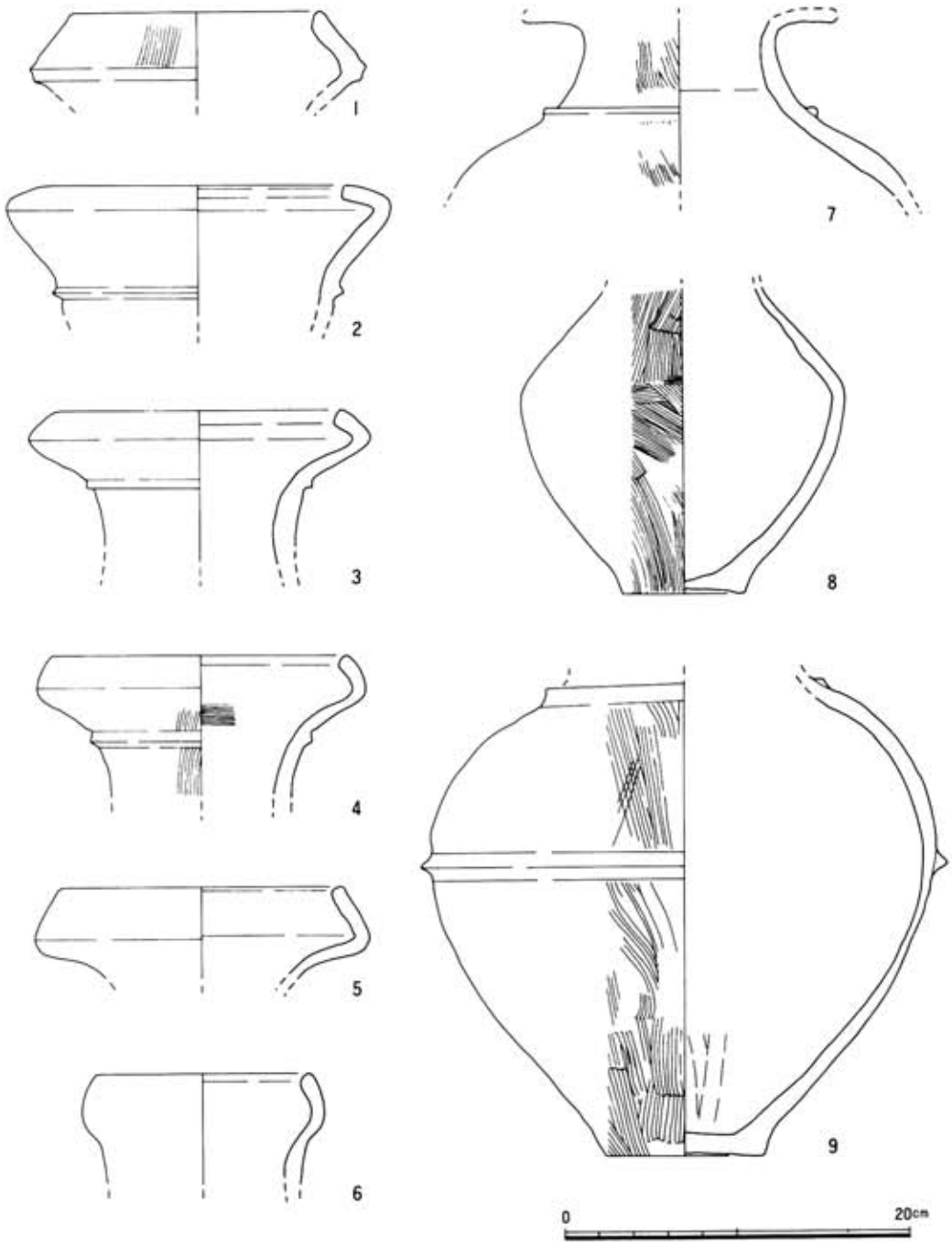


Fig. 5　SX101出土土器実測図(1)

し、器形は裁頭卵形を呈すると考えられる。口縁部はヨコナデ、体部はナデである。復元口外径37.7cm、口内径25.4cmである。13はくの字形口縁を有し、復元口径36.0cm。口縁部はヨコナデ、体部外面は磨耗しているがわずかにハケ目が残る。14は口縁部がくの字形に近い逆L字形をなし、口縁部下に断面三角形突帯をめぐらす。口縁部がヨコナデ、ほかはナデである。復元口径30.2cm。15・16はくの字形口縁を有し、口縁部下に断面三角形突帯をめぐらす。15に比べて16は口縁部が厚い。口縁部はヨコナデ、体部内外面はハケ目。15は復元口径42.8cm、16は49.0cmである。17～22は甕の口縁部片である。17は逆L字形口縁を有し、口縁部はヨコナデ、体部内外面ナデ。復元口径22.5cm。18は逆L字形口縁をもつが、口縁部内側の稜もゆるやかで、口縁部上端は内傾している。口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ目、内面ナデ、復元口径20.9cm。19は胴部にやや丸味をもち、口縁部は直線的に外反する。口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ目、内面はナデであるがヘラ状工具のあたった跡が残る。復元口径17.9cm。20はくの字形口縁をなし、口縁端部は丸味をもつ。胴部最大径と口径はほぼ変わらない。口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ目、内面はヘラ状工具によるナデの後さらにナデており、斜め方向にヘラ状工具のあたった跡が残る。復元口径22.0cm。21・22もくの字形口縁であるが、21はやや丸味をもち、22は口縁端部が丸く、そして厚い。21は口縁部外面ヨコナデ、内面はハケ目の後ヨコナデ、体部外面は不定方向のハケ目、内面ナデ。復元口径31.2cm。22は口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ目、内面はナデ。復元口径30.1cm。23～26は底部片である。23は平底から体部が直線的に開くもので、底部内外面はナデ、体部外面はハケ目、内面はヘラ状工具によるナデである。24は体部外面ハケ目、内面はナデで指頭圧痕が残る。25は内外面ともナデで、内面には指頭圧痕が残る。26は体部外面ハケ目、内面はナデである。28～33は小型の甕である。28は平底で、体部はやや内湾しながら立ち上がり、口縁部は外反する。底部は指で押さえており、ややくびれをもつ。体部中位に断面三角形突帯を1条めぐらし、突帯部分は強くナデている。体部外面はていねいにナデており、部分的に指頭圧痕が残る。口縁部はヨコナデ、内面上半部はヘラ状工具によるナデで、工具のあたった跡が左回りに残っている。下半部はナデ上げた後、部分的にていねいなナデがなされている。体部下半部から底部にかけ一部黒斑がある。口径10.8cm、器高10.1cm、底径5.8cm。28は体部が丸味をもち、口縁部はくの字形である。胴部に1条の断面三角形突帯をめぐらす。口縁部および突帯部はヨコナデ、ほかはナデである。復元口径7.9cm。30は平底に丸味をもつ体部がつき、口縁部は短く外反し、最大胴径は体部上位にもつ。口縁部ヨコナデ、体部外面はハケ目だが器面が磨耗しているため不明瞭である。内面はナデで、下半部に指頭圧痕が残る。復元口径10.6cm、器高12.5cm。31は体部が膨みをもち、口縁部は外反する。底部はやや丸味をもち不安定である。体部の器壁は厚いが、口縁部は薄い。口縁部はヨコナデ、体部外面は斜め方向のハケ目、内面はナデで部分的に指頭圧痕が残る。底部外面はナデである。復元口径 9.7cm、器高14.3cm、底径5.6cm。32は体部が丸味をもつ。口縁部は外反し、口縁端部はわずかに肥

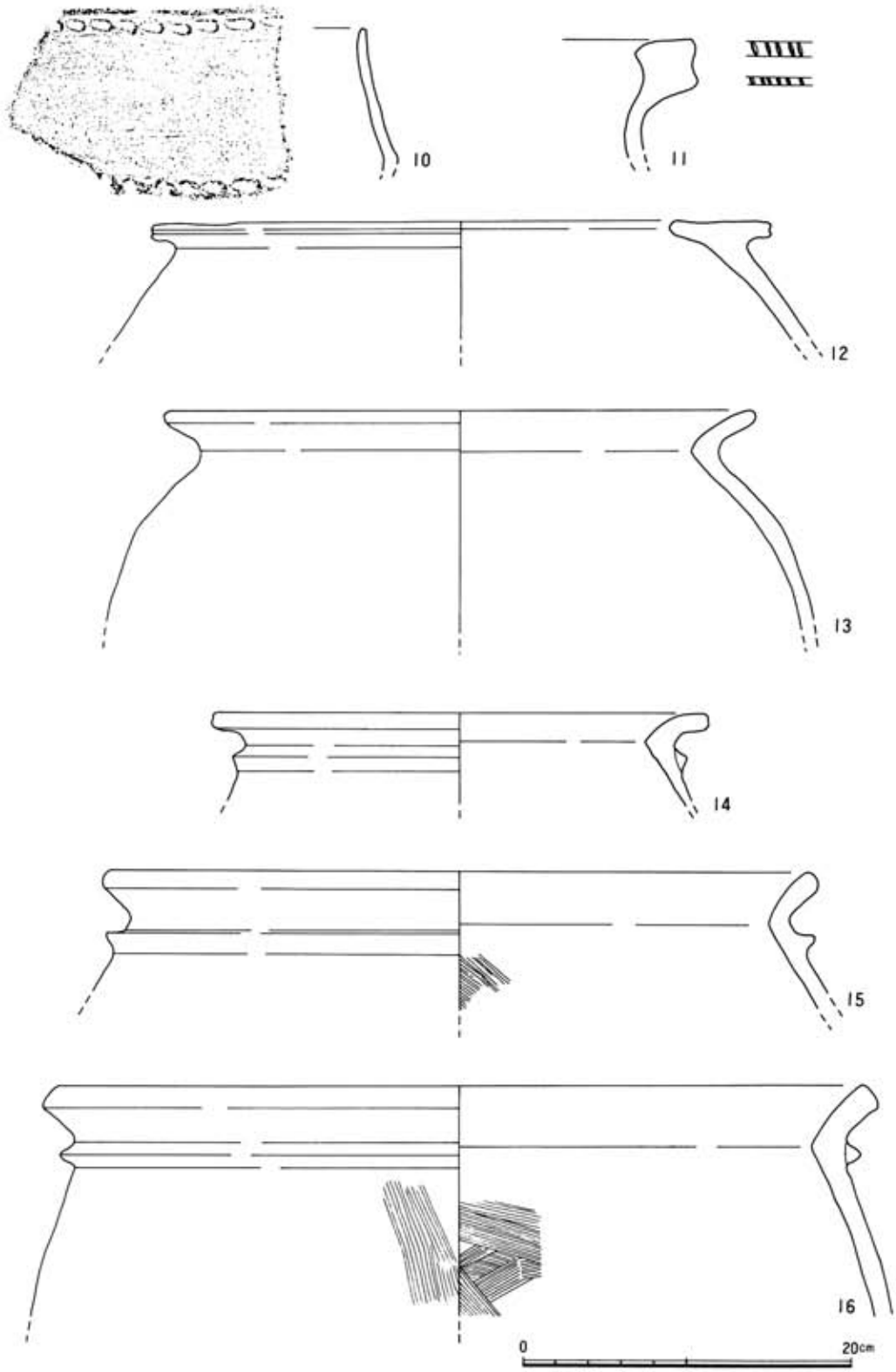


Fig. 6　SX101出土土器実測図(2)

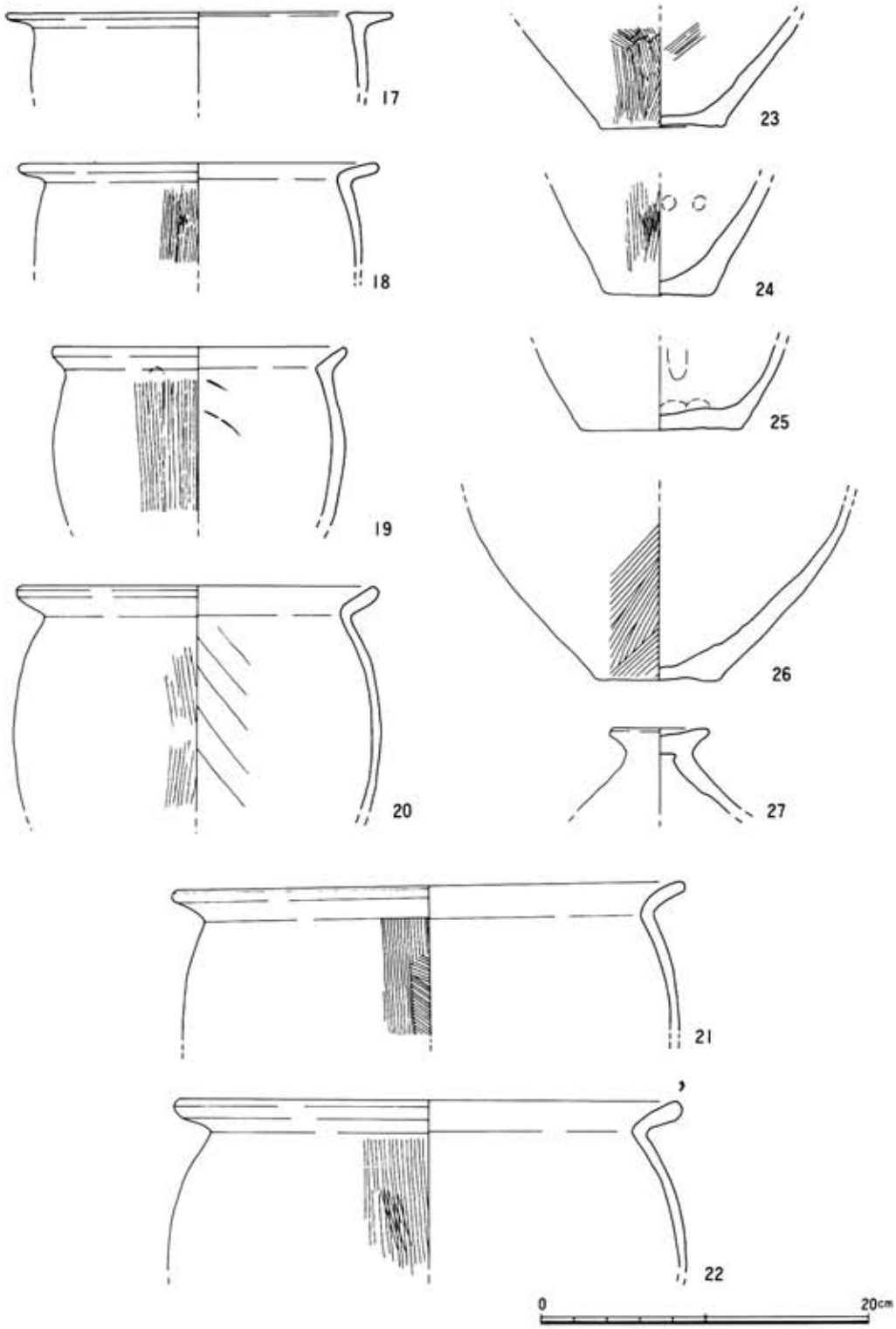


Fig. 7　SX101出土土器実測図(3)

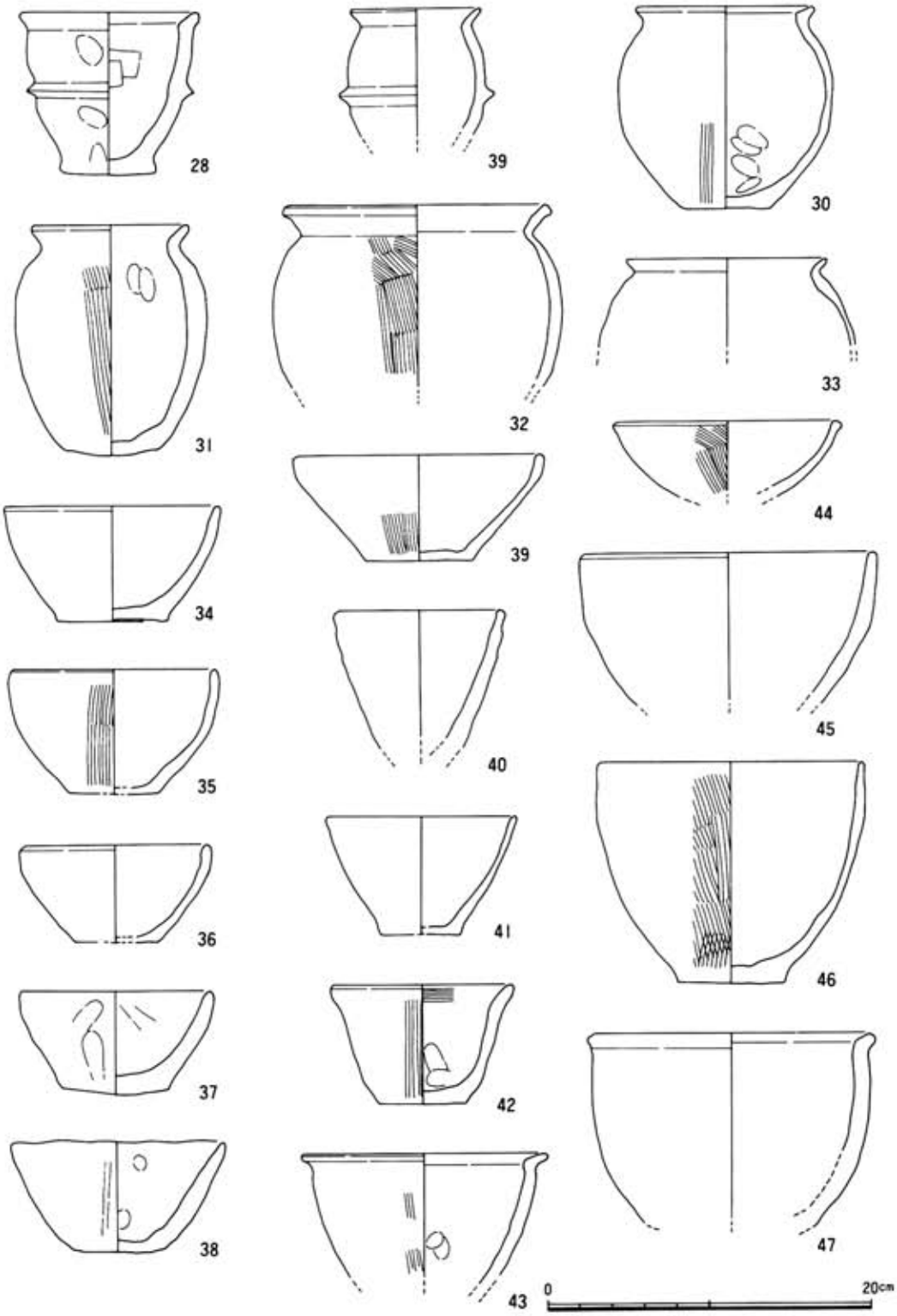


Fig. 8　SX101出土土器実測図(4)

厚する。口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ目、内面ナデ。復元口径16.4cm。33は口縁部は短く反反し、体部は丸味をもつ。口縁部はヨコナデ、体部内外面は磨耗のため不明瞭である。体部に比べ口縁部下はやや厚みがある。復元口径12.3cm

蓋（Fig. 7－27）

笠形に開くもので、底部はやや上げ底気味でつまみ状になっている。底部外面はナデ、体部外面ハケ目、内面ナデである。

鉢（Fig. 8－34～37、9、PL.16～18）

40・44を除いて平底である。34～36は体部が内湾しながら開くもので、34は復元口径13.6cm、器高7.1cm。口縁部ヨコナデ、体部内面はナデ、外面はナデで下半部に指頭圧痕が残る。また下半部から底部にかけて一部黒斑がある。35は復元口径12.9cm、器高7.7cm。口縁部ヨコナデ、体部内面ナデ、外面はハケ目、下半部から底部にかけ黒斑がある。36は復元口径12.0cm、器高6.1cm。口縁部ヨコナデ、体部内面ナデ、外面はハケ目であろうが磨耗のため不明瞭である。32・33は体部が直線的に開き、器肉が厚い。32はナデ調整であり、体部外面に指頭圧痕、内面にヘラ状工具のあたった跡が残る。口径11.8cm、器高6.4cm。33は体部内面はナデで、ヘラ状工具のあたった跡と指頭圧痕が残り、外面はヘラで面取りをした後ハケ目。復元口径13.4cm、器高6.8cm。39は体部が直線的に開き、口縁部は直口する。ほかの鉢に比べ口縁部の開き方が大きい。口縁部はヨコナデ、体部外面ハケ目、内面はハケ目後ナデで部分的にハケ目残る。復元口径15cm、器高6.6cm、40は底部を欠く。直線的に開く体部に端部の丸い口縁がつく。復元口径9.5cm、体部内外面ともナデ、内面はヘラ状工具のあたった跡が残る。41は復元口径11.6cm、器高7.3cm、器面は磨耗しているため調整は不明瞭である。42は口縁部をゆるやかに外反させている。口縁部ヨコナデ、口縁直下内面は横方向のハケ目、体部内面はナデとヨコナデ、外面は縦方向のハケ目、体部下半と底部に黒斑がある。復元口径11.3cm、器高7.4cm。43は口縁部を強く外反させている。口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ目、内面ナデ、復元口径14.4cm。44は体部の開き方が大きいもので、復元口径は14.1cm、口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ目、内面はナデである。45～47は他の鉢より大きく、45・46は口縁部は直口するが、47は端部をわずかに外反させる。45は体部内外面ナデ、口縁部ヨコナデ、復元口径18.4cm、41は復元口径16.1cm、器高13.7cm、体部外面はハケ目、内面はヘラナデ、口縁部はヨコナデである。47は磨耗が激しく調整は不明瞭だが、内面にはヘラ状工具のあたった跡が残る。復元口径17.7cm。48～63は小型の鉢で、手捏ね土器も含まれる。48は復元口径が3.2cmのミニチュア土器で、器形は胴長である。口縁は直口し、やや厚い底部へと続く。49は平底で直線的に開く体部をもち、器肉は全体的に厚い、口縁部はヨコナデ、体部外面はナデ、内面はナデ、内面はヘラ状工具によるナデで、工具のあたった跡がみえる。口径5.7cm、器高3.1cm。51、51は平底に内湾しながら開く体部のつくもので、50は口径7.3cm、器高3.9cm、51は復元口径7.6cm、器高3.4cmである。50は口縁部ヨコナデ、体

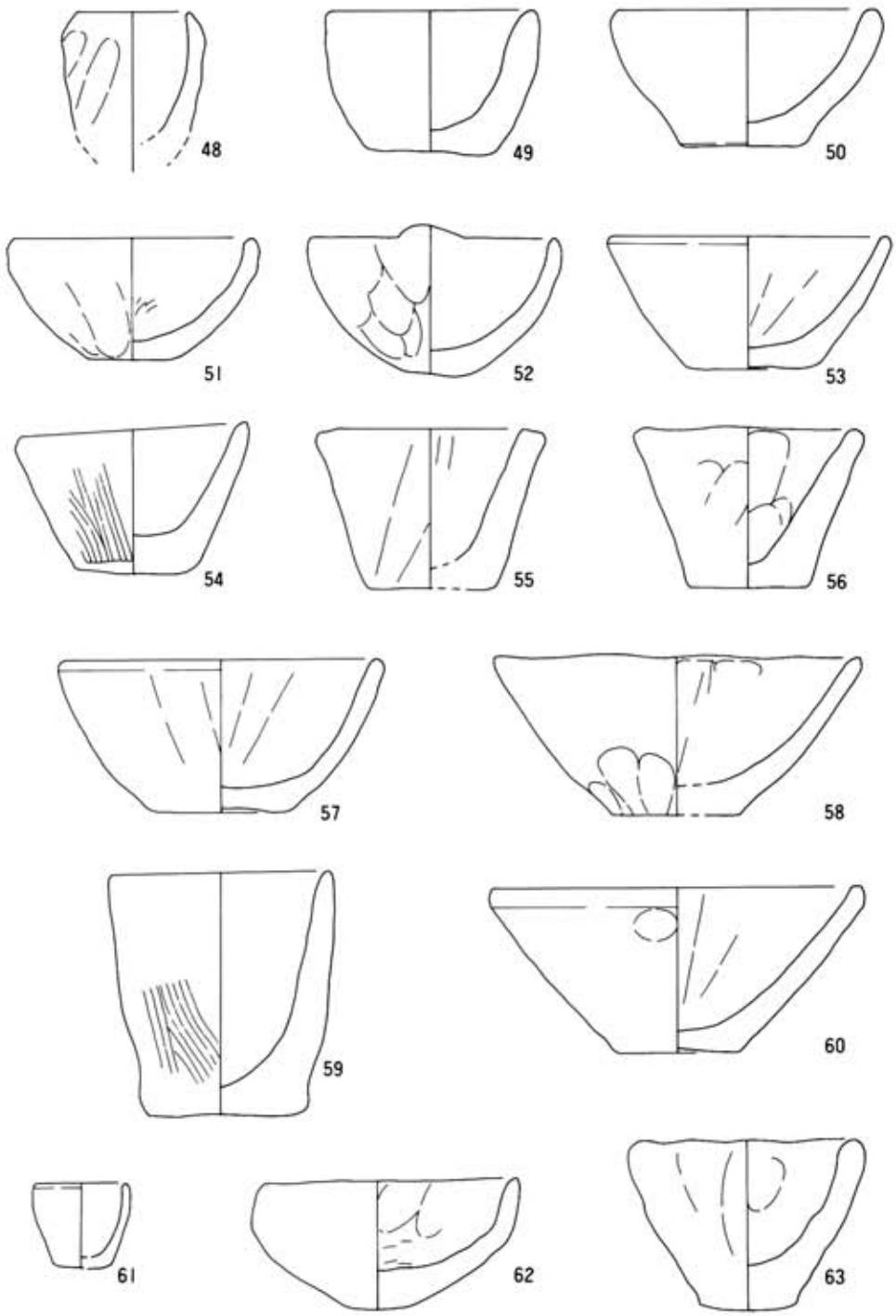


Fig. 9　SX101出土土器実測図(5)

0　20cm

部外面ナデ、内面ヘラ状工具によるナデ、51は口縁部は指押え、体部はナデで、外面に指頭圧痕が残る。52は丸底に近い平底に、内湾しながら開く体部がつき、口縁部に１ヶ所突起がある。口径７cm、器高3.9cm。53～58、60は平底で体部が直線的に開くものだが、49～51は器肉が厚い。53は口径8.1cm、器高3.8cm、体部内面にヘラのあたった跡と指頭圧痕が残る。外面ともナデ。54は口縁部ヨコナデ、体部内面および底部はナデ、体部外面はハケメの後ナデ、ハケメが部分的に残る。口径6.6cm、器高4.1cm。55は復元口径5.2cm、器高4.5cm、口縁部の厚さは体部とほぼ同じで、口縁端部は平坦である。体部内外面ともナデ、内面にはほんの一部ヘラのあたった跡が残る。56は復元口径6.4cm、器高4.5cm、内外面ともナデで指頭圧痕が残るが、体部外面はヘラ状のもので面取りした後ナデている。57は復元口径9.3cm、器高4.35cm、58は復元口径10.3cm、器高4.5cm、体部内外面ナデだが、57は両面に、58は内面にヘラのあたった跡が残る。58の体部外面には指頭圧痕がみえ、黒斑が体部下半から底部にかけてある。60は体部両面ともヘラあて後ナデ、外面に指頭圧痕残る。復元口径10.9cm、器高4.7cm。54は口径6.2cm、器高6.9cmの胴長のもので、器肉は全体的に厚い。口縁部ヨコナデ、体部内面ナデ、外面下半にはハケメである。61はＳＤ106溝出土のミニチュア土器である。復元口径2.8cm、器高2.4cm。62はＳＤ201溝出土のもので、丸底に近い平底から開き、体部中位で屈曲し、口縁部は直口する。口径7.2cm、器高3.75cm、全体に指頭圧痕残る。63はＳＤ106溝出土で、後元口径6.7cm、器高4.9cm、口縁部ヨコナデ、体部内外面ナデ、外面ヘラのあたった跡が残る。

高杯（Fig.10－64～71・PL.18）

64～67はいわゆる鋤先状口縁を有するもので、外側にのびて平坦面をつくり出している。64は復元口径26.1cm、口縁部ヨコナデ、杯部内面ナデ、外面はハケ目だが磨耗が激しく不明瞭である。65は復元口径21.6cm、杯部は直線的に開いてる。口縁部ヨコナデ、杯部はナデである。66は復元口径27.1cm、口縁部ヨコナデ、杯部外面ハケ目、内面はヘラミガキを施す。67は口縁外側へ垂れ下がる。杯部は丸味をもち、脚部はラッパ状に開く。口径23.9cm、器高26.5cm、脚裾部14.8cm、口縁部ヨコナデ、杯部内面ナデ、杯部および脚部外面ハケメ、脚裾部ヨコナデ脚部内面ナデ。68は口縁がくの字状に外側にのびる。口縁部ヨコナデ、杯部外面ナデ、内面はヘラナデでヘラ状工具のあたった跡が残る。口径22.9cm。69～71は脚部のみ残存する。裾部はラッパ状に開き、脚部内面にシボリ痕がある。69は裾径11.3cm、脚高8.2cm、裾部ヨコナデ、脚部外面はヘラミガキを施す。70は裾部ヨコナデ、脚部外面ハケメ、内面ナデである。復元裾径13.2cm、脚高10.5cm。71は脚部が長く、裾はラッパ状に開く。脚部外面はハケメとナデ、内面はハケメ、裾部はヨコナデである。復元裾径17.4cm、脚高17.1cm。

器台（Fig.10、72～75、PL.19）

72は手捏ね土器である。復元口径4.2cm、裾径5.6cm、器高6.9cm。73は小型のもので復元口径８cm、裾径6.4cm、器高9.6cm、体部内外面にシボリ痕、外面には指頭圧痕も残る。74はくびれ

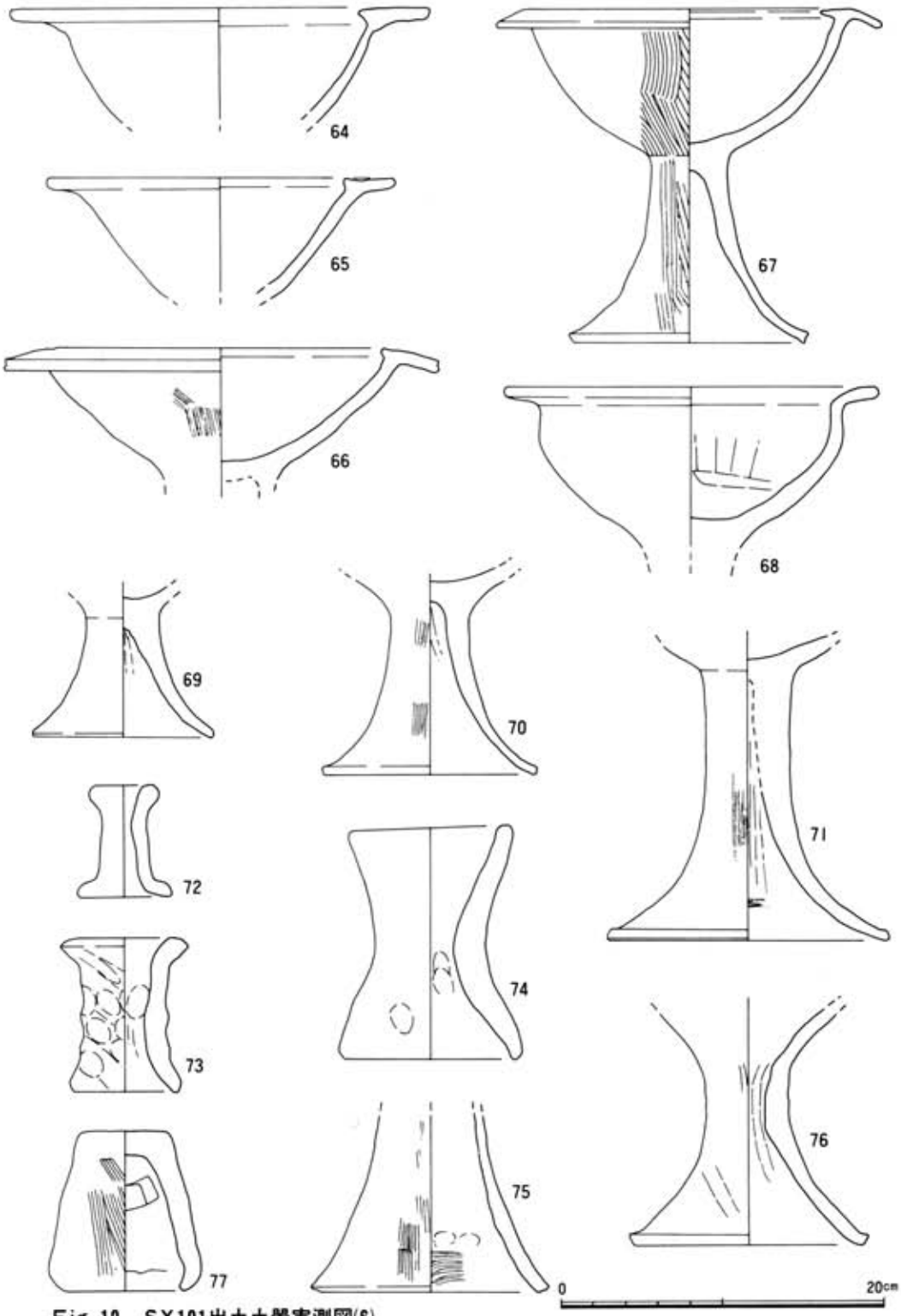


Fig.10　SX101出土土器実測図(6)

がほぼ体部中位にある。口縁部および裾部ヨコナデ、体部外面ナデ、内面はシボリ痕と指頭圧痕が残る。口径10.1cm、裾径11.4cm、器高14.4cm。75は下半部で、復元裾径は14.6cm、外面はタテ方向のハケメ、内面はナデと裾付近でヨコ方向のハケメ、裾部はヨコナデである。76は復元裾径14.8cm、口縁部ヨコナデ、体部外面ハケメ、内面はナデでシボリ痕が残る。

支脚（Fig.10、72）

裾径7.2cm、器高10.1cm、受部は平坦で径は5.4cmである。体部は下外方に開いて内側に空間を

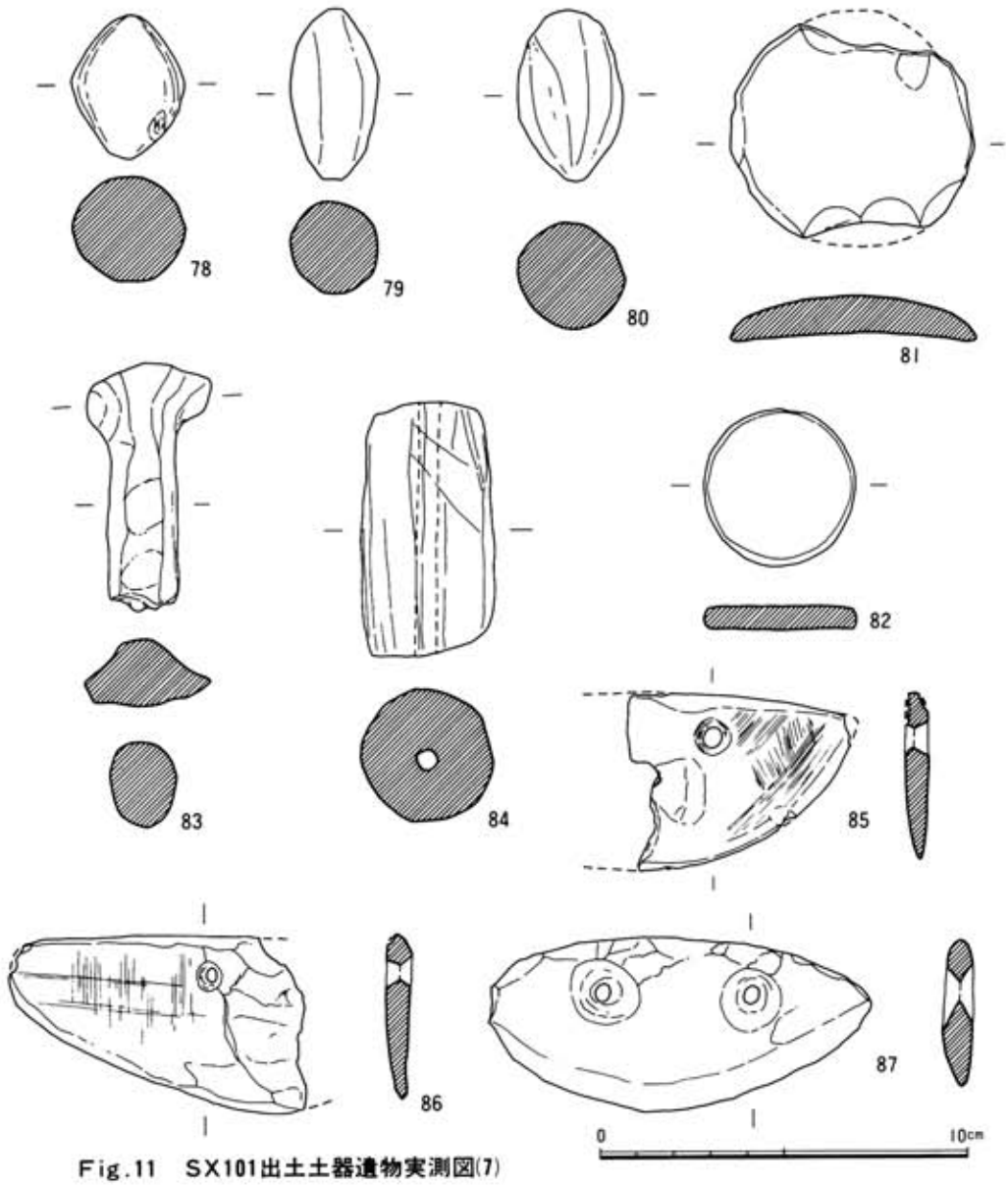


Fig.11　SX101出土土器遺物実測図(7)

つくり出し、裾部で内側に折れ曲がる。受部ナデ、体部外面ハケメで部分的にナデ、内面はヘラナデである。裾部はナデである。

土製品（Fig.11、78～84、PL.19. 20）

土弾（78～80）、円盤（81、82）、把手状土製品（83）、錘（84）がある。

78は長さ3.9cm、径3cm、79は長さ4.6cm、径2.4cm、80は長さ4.6cm、復元径2.8cm、一部黒斑がある。

81は径6.6cm、厚さ1cm、片方がやや膨む三日月形で、82は径4.1cm、厚さ0.65cm、両面とも平坦である。

83は先端がやや膨み、断面は三角形に近いが、それ以外は径約2cmの円形である。残存長さ6.7cm。

84は長さ6.8cm、径3.6cmの円柱状であり、孔径は0.55cmある。体部は面取りをした後ナデて円形にしている。一部に黒斑がある。

石製品（Fig.11－85～87、PL.20）

石包丁である。85は泥質砂岩製で½程欠損する。幅4.7cm、厚さ0.6cm、半月形をなし刃部は鋭いが体部との境は不明瞭である。紐通し穴は0.5cmで両側より穿孔している。86も頁岩製で½程欠損する半月形のものである。幅7cm、厚さ0.65cm、両刃で背面は丸味をもつ。紐通し穴は0.4cmで両側より穿孔している。87は砂岩製でほぼ完形である。長さ10.3cm、幅4.7cm、厚さ0.8cm、両刃だが刃部は鈍く、体部との境も不明瞭、背面は丸味をもつ。紐通し穴は0.4cmで両側より穿孔し、紐通し穴間は3.7cmある。

ＳＤ05溝出土遺物（Fig.12、88～92）

88は二重口縁の壺である。口縁部はやや開き気味に立ち上がり、口縁端部で直口する。頸部に断面三角形突帯をめぐらし、突帯には刻み目を施す。口縁部外面には櫛描波状文と竹管文を施し、内面には部分的に黒塗りの跡が残る。復元口径21.3cm。89は胴部に最大径をもつ甕で、口縁部はほぼ直立する。底部は平底で、外底中心部は剥離している。また胴部の大半も剥離している。口縁部はヨコナデ、体部外面は粗いハケ目、内面は指頭調整後ヘラナデでヘラ状工具のあたった跡が残る。胴部に黒斑がある。復元口径12.7cm、器高21.6cm。90は蓋である。上位外面に3個の穴を意識的に穿っている。91は小甕で、底部は粗雑なつくりで上げ底気味になっている。体部外面はハケメだが磨耗のため不明瞭である。内面はナデ、底部および体下半部に黒斑がある。92は小甕である。やや丸底気味の平底に内湾しながら立ち上がる体部がつき、口縁部は外反する。口縁部は薄手だが、体部は厚い。口縁部はヨコナデ、体部内外面はハケ目を施すが、磨耗のため不明瞭である。復元口径13cm、器高11.5cm。

その他の土器（Fig.12、93～98）

93～97はＳＤ101溝出土、98はＰ120出土のもので、いずれも土師器である。97は高台付椀で、

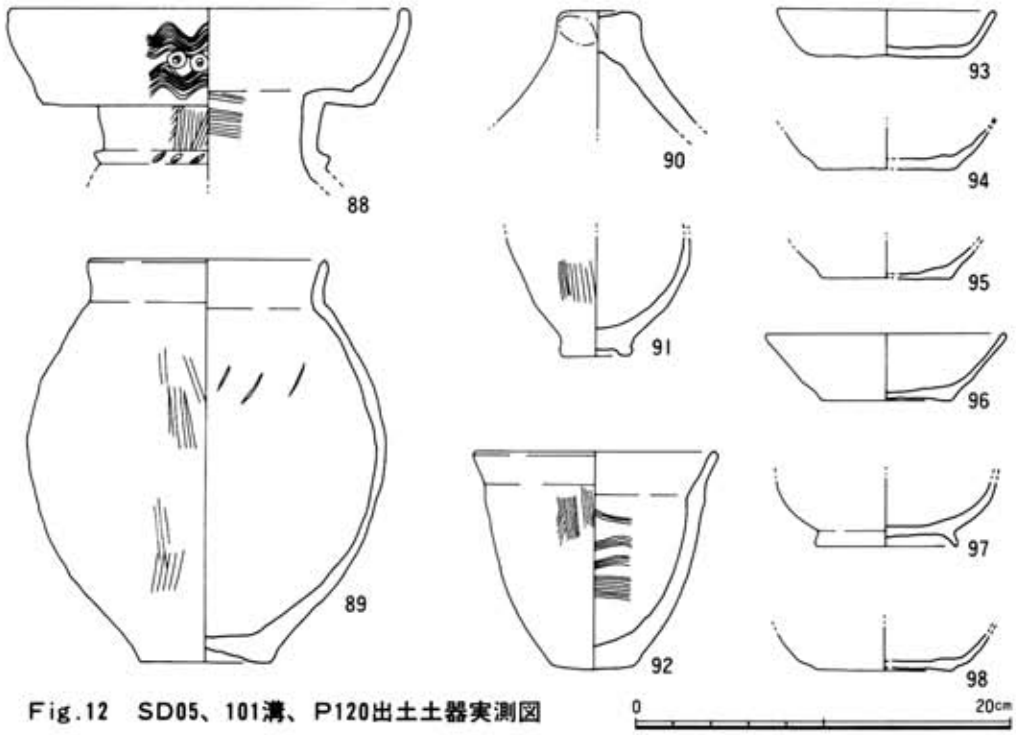


Fig.12　SD05、101溝、P120出土土器実測図

その他は杯である。93は平底に短く開く口縁部がつき、口縁端部は丸味をもつ。底部はヘラ切り離しの跡が残り、内面はナデ、口縁部は内外面ともヨコナデである。復元口径11.6cm、底径8cm、器高2.4cm。94、95は口縁端部を欠くが、形態的には96と同じく平底から口縁部が直線的に開き、93に比べ口径と底径の差があるものである。94は底径7.4cm、95は底径6.8cm、ヘラ切り離しの跡が残る。96は復元口径12.8cm、底径7cm、器高3.5cm、口縁部内外面ヨコナデ、底部内面はナデ、外面はヘラ切り離しの後ナデている。97は低く外側に開く高台を持ち、体部は内湾しながら立ち上がる。高台径7.5cm。98は平底に内湾しながら立ち上がる口縁部がつくものである。復元底径7.4cm。

Ⅲ．ま　と　め

今回の調査では、溝・小穴等の遺構を検出しているが、調査区域を幅３ｍと10ｍの水路部分に限定したため、また遺物もＳＤ05構、ＳＤ101構、ＳＸ101遺構から比較的まとまって出土したほかは小破片が多く、遺構の相互関係等をつかむまでには至らなかった。

昭和25年の調査では、竪穴住居跡、泉及び洗い場が検出されているが、今回はこれらの遺構はない。ただ小穴のなかに柱穴と考えられるものがあるが、竪穴住居跡のそれとは断定しにくく、また平面が方形の小穴は掘立柱建物跡のものである。Ｂ区のＰ120はＳＤ101溝と切り合う平面円形の小穴だが、この底からは水がとめどなく湧き出しており、井戸としての用途も伺える。溝はＳＤ04溝、ＳＤ05溝、ＳＤ101溝を除いては、幅0.5ｍ以下の小規模のものである。ＳＤ05溝は、幅2.4ｍと規模が大きく、上層付近から弥生中期末～後期前半にかけての土器片が出土し、下層では、遺物をほとんど検出しなかった。ただ１点ではあるが、壙底から古墳時代前期の二重口縁の壺が出土しており、この時期の所産と考えるが、他の共伴する遺物がなく結論づけかねる。ＳＤ101溝からは、平安時代前半の土師器の杯が出土しており、またＰ108、109、110の柱穴にも同様の土師器片や内黒の椀がみられ、同時期のものである。

ＳＸ101遺構では、遺物出土量の半数以上を占める、おびただしい土器、石器が出土している。遺構の形態はつかめないが、土器は10～20cmの層をなして出土している。土器では弥生中期末～後期前半の壺、甕、鉢、高杯、器台、支脚、土製品、それに石包丁がみられ、小型の甕や鉢に完形品が多い。甕や鉢には、体部内面にヘラ状工具によるナデの痕跡が多くみられることも、特徴的である。ＳＸ101遺構の遺物はほぼこの時期のものに一定しているが、なかにはＦｉｇ．６－10の縄文晩期の甕や11の弥生前期末の甕が混入している。この遺構は出土状態からみて、廃棄場としての性格が考えられよう。

今回の調査では、遺跡の存在時期はＳＤ05溝を除いておおまかに２時期に区分できる。弥生中期末～後期前半と、平安時代前半である。昭和57年度には、今回の調査区域より北側の地域を調査しているが、甕棺や土壙墓、石棺墓等の埋葬施設が検出されており、遺跡の北側に墓域、南側に生活の場が伺われる。久留間カミ塚遺跡全体からみて、調査部分はまだ一部にすぎず、全容を把握できたとは言いかねるが、弥生中期頃からこの地に生活が営まれ、その後は久留間カミ塚遺跡東方の池上集落一帯に生活の場は移っていったと考えられる。

弥生時代中期末～後期前半にかけての遺跡はまだ数少なく、この付近においては七ヶ瀬遺跡の例を知るのみである。大和町でも発掘調査件数が増加する傾向にあり、今後資料の増加に伴って編年的検討が必要であろう。

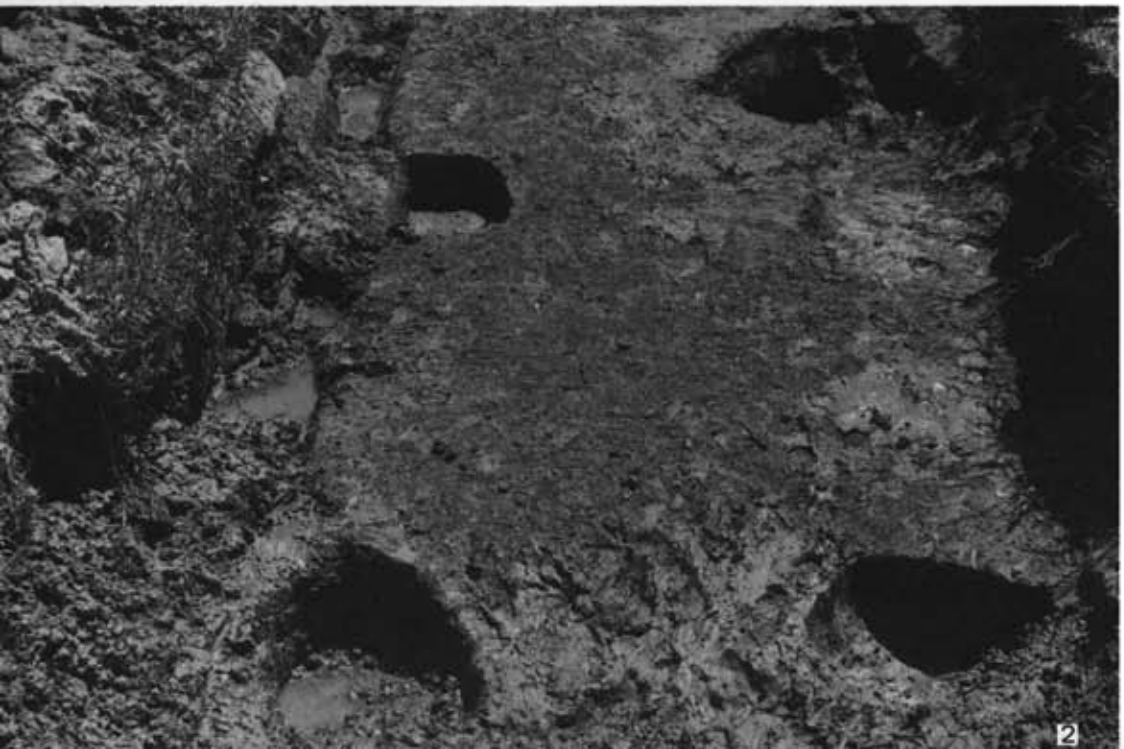
図　　版

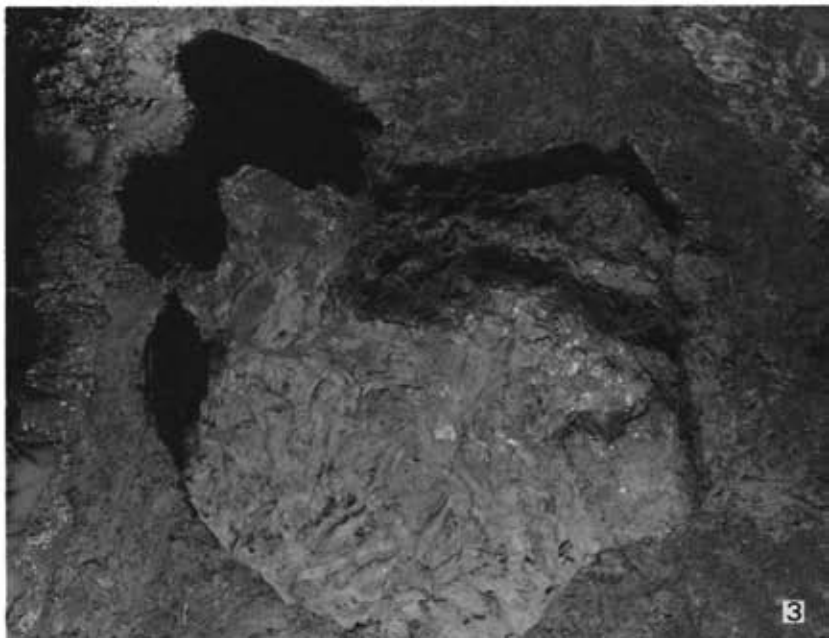
1. 久留間カミ塚全景(南西から)
2. 同 (南から)

1. A区北側全景(北から)　　2.　同　(南から)

1. A区南側全景(北から)　　2. B区全景(東から)

1. ＳＤ03溝(北から)
2. Ａ区北側Ｐ28付近(北から)





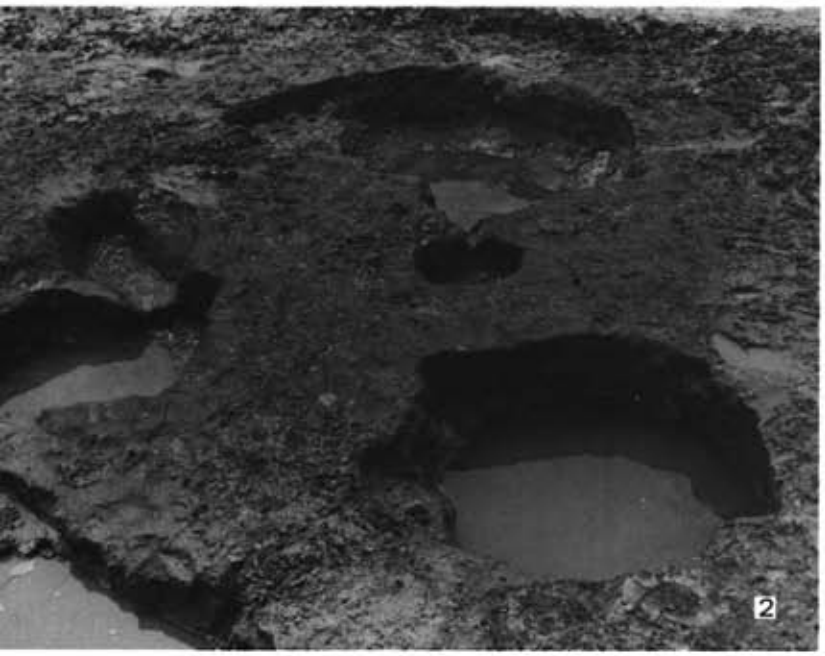
1. P23 (北から)
2. P17(手前)P20(北から)
3. P24 (北から)

1. ＳＤ05溝　（南から）
2.　同　　（北から）
3. ＳＤ07.08溝（東から）

1. A区南側近景(南から)
2. 同 (北から)
3. 同 (西から)

1. P23 (北から)
2. P20 (北から)
3. P24 (北から)

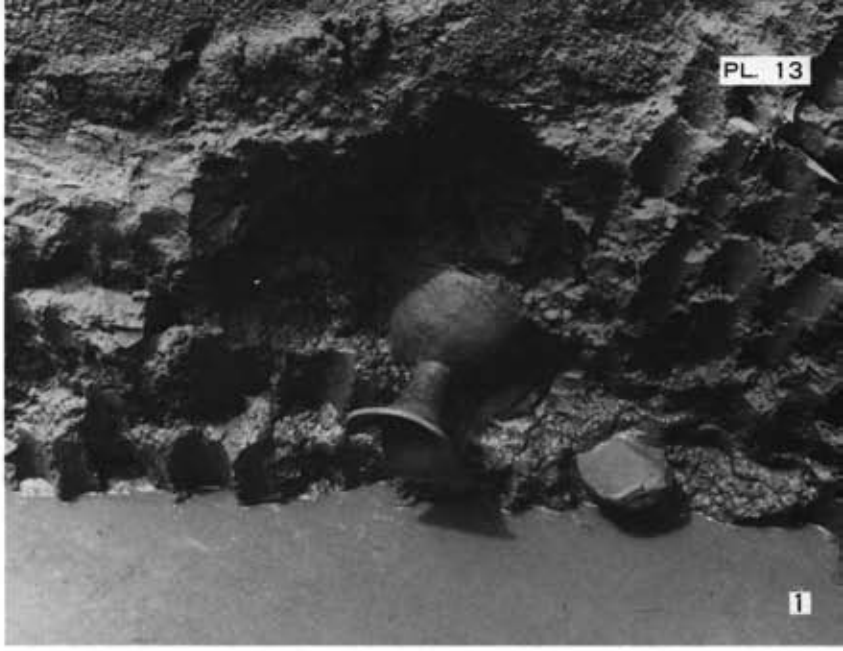
1. P110付近(西から)
2. P109　(北から)
3. P108　(北から)



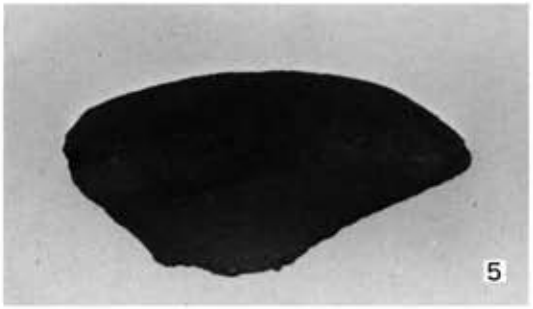
1. B区東側近景(南から)
2. P102付近　(北から)
3. SD101 溝およびP120
(東から)

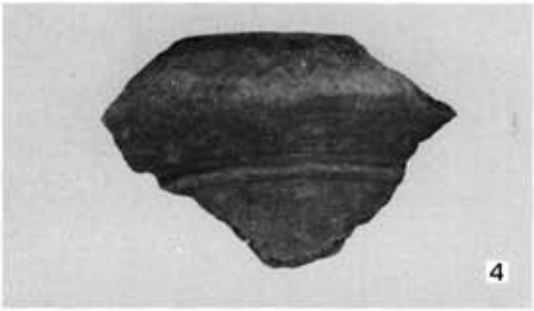
1. ＳＸ101（北から）
2. 同　遺物出土状態（北から）
3. 同　（北から）

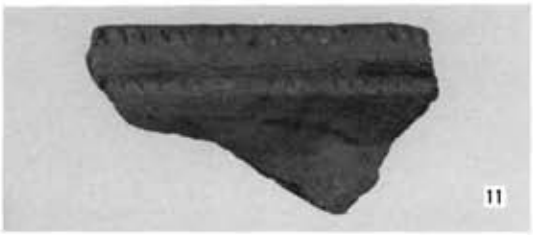
1. ＳＸ101 遺物出土状態
2. 同 （南から）
3. 同 （東から）

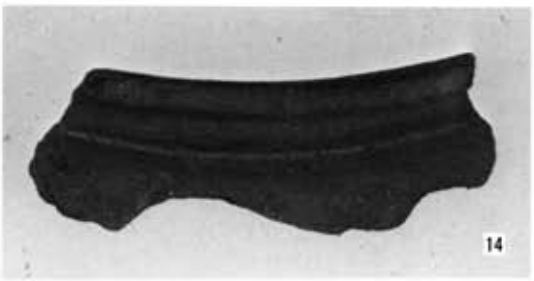


1. ＳＸ101 遺物出土状態
2. 同 （南から）
3. 同 （東から）
3. 同 （南から）

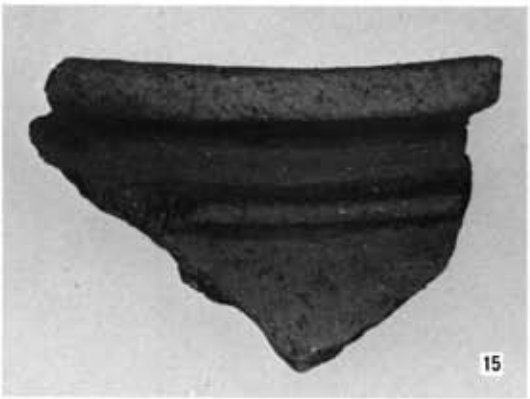


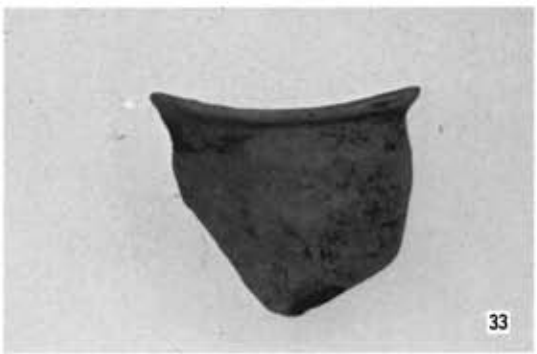




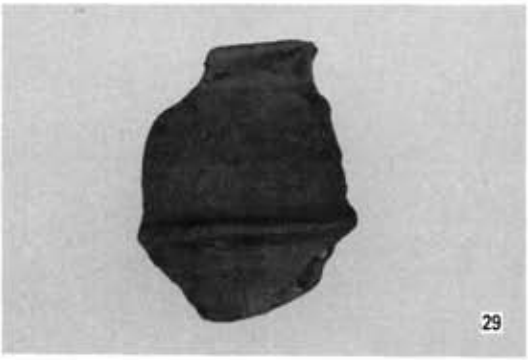


S X 101 出土土器



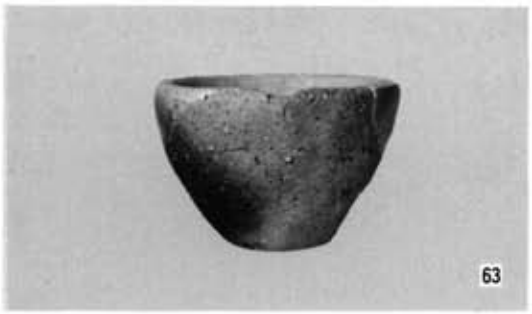


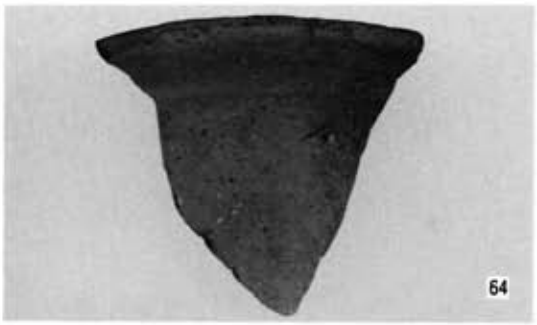
S X101 出土土器



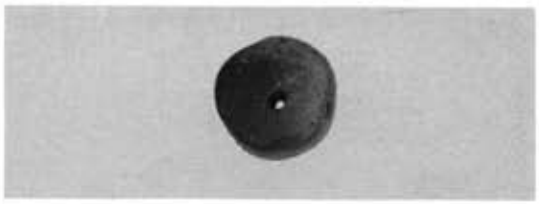
S X 101 出土土器

S X 101 出土土器

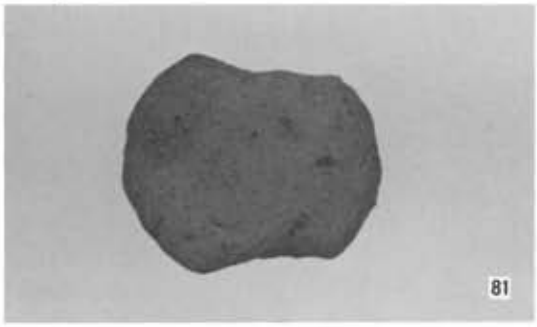


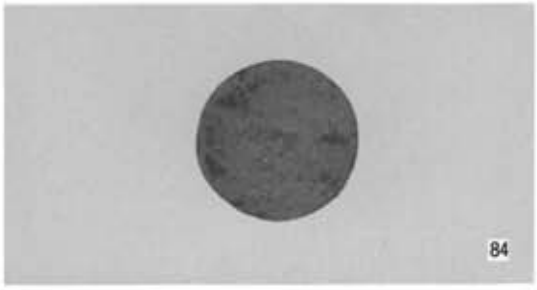


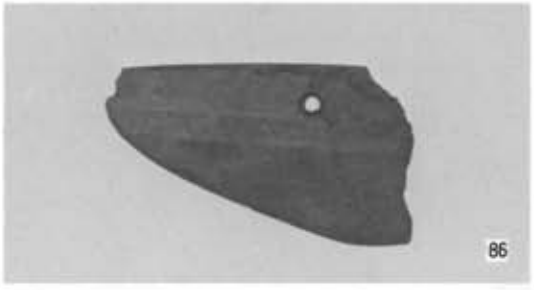
S X101 出土土器

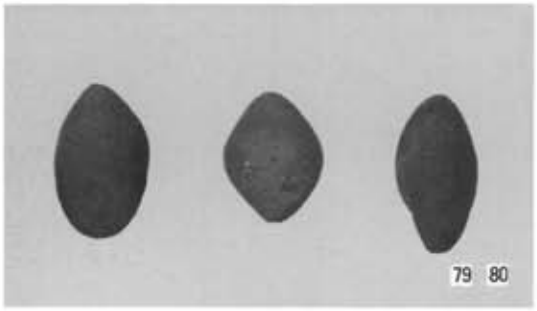


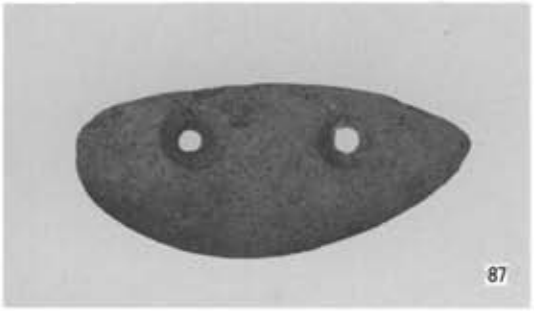
S X 101 出土土器



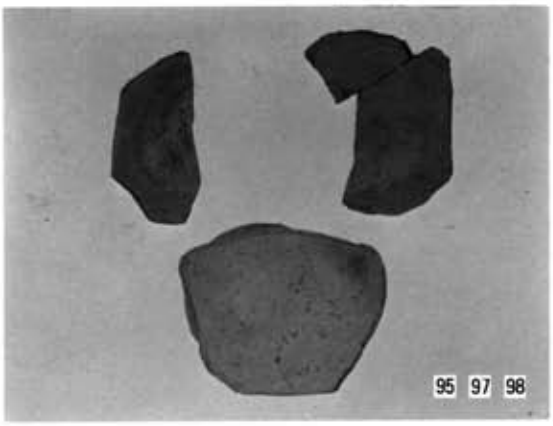








ＳＸ101 出土遺物
81.84　円盤
79.80　土錘
85～87　石包丁
10　縄文土器



SD05・101溝P120 出土土器

佐賀県文化財調査報告書第63集

久留間カミ塚遺跡Ａ地点

昭和57年３月31日

発行　佐賀県教育委員会
佐賀市城内一丁目

印刷　日之出印刷株式会社
佐賀市高木瀬町大字長瀬1136-55